

包子内親王（清和天皇皇女）

皇女研究会

包子内親王は在原行平女を生母とする清和天皇の皇女である。外祖父在原行平は『伊勢物語』等で知られる業平の兄であり、平城天皇の孫にあたる。地方民政において業績をあげた有能な官吏であり、また行平自身、勅撰集『古今和歌集』に四首、『後撰和歌集』に四首入集、『在民部卿歌合』を催すなど、風雅な人物であった。

『三代実録』貞観十五年（八七三）四月二十一日条には清和天皇の皇子女のうち、八人の親王宣下、四人の源氏賜姓が記載されている。

是日。定親王八人。源氏四人。皇子貞固。母橘氏。治部大輔休蔭之女。皇子貞元。母藤原氏。参議治部卿仲統之女。皇子貞保。母女御藤原氏。故中納言長良之女。皇子貞平。母藤原氏。右中弁良近之女。皇

子貞純。母王氏。中務大輔棟貞之女。皇女孟子。母藤原氏。兵部大輔諸葛之女。皇女包子。母在原氏。参議左衛門督行平之女。皇女敦子。與貞保同母。並爲親王。皇子長猷。母賀茂氏。越中守峯雄之女。皇子長淵。母大野氏。前石見守鷹取之女。皇子長鑒。母佐伯氏。信濃權介子房之女。皇女載子。與長猷同母。並爲源氏。貫隸左京一條一坊。

（太字は筆者による。以下同）

『本朝皇胤紹運録』などに包子内親王と同母とされる貞数親王は、貞観十八年（八七六）三月十三日条に「年二歳」とある。貞観十七年生まれである（1）。したがって包子内親王が姉、貞数親王が弟で、厳密に言えば二歳以上、おそらくは三歳以上の年齢差があることになる。

包子内親王の誕生年を推定するため、まず親王宣下をうけた冒頭『三代実録』の記事に名前が挙がる他の皇子の年齢を考察する。父清和天皇は貞観六年（八六四）に十五歳で元服している。貞観十五年（八七三）は二十四歳である。一応記事に名前があがる皇子たち清和天皇の元服以降の出生と考えておき、左表を作成した。なお比較の都合上、陽成天皇（貞明）も表に入れた。

陽成天皇と同母である貞保親王は『三代実録』に誕生の記事があり、それによれば貞観十二年（八七〇）生まれである。したがって親王宣下時は四歳であった。

『三代実録』貞観十二年九月

十三日壬戌。第四皇子（貞保）誕。皇太子同母弟也。

これによれば貞保親王は第四皇子である。冒頭の記事では貞固、貞元、貞保と第三番目に記述され、同母兄貞明親王（陽成天皇）をいれば、確かに第四番目となり、合致する。一方『尊卑分脈』では貞平親王が、貞保親王よりも先に記述されているが、これは異母兄弟である貞保親王と貞平親王が、同じ年齢であるため、記述が前後

	生母	誕生	元服	直叙	貞観十五年（八七三）時の年齢
1	貞明（陽成） 藤原高子	貞観十年（八六八）	元慶六年（八八二）		六歳
2	貞固 橘休蔭女			元慶八年（八八四）四品	五歳（推定）
3	貞元 藤原仲統女			仁和三年（八八七）四品	四歳（推定）
4	貞保 藤原高子	貞観十二年（八七〇）	元慶六年（八八二）	元慶六年（八八二）三品	四歳
5	貞平 藤原良近女				四歳（推定）
6	貞純 棟貞王女				

したのではないかと考えられる。

第二皇子貞固親王と第三皇子貞元親王は、誕生年は不明であるが、無品から四品に叙された年がわかっており、それぞれ元慶八年（八八四）、仁和三年（八八七）である。あとで述べる貞保親王の例からいって、このときが元服の年と考えられる。

『三代実録』元慶八年（八八四）二月

廿三日甲寅。天皇即位於大極殿。詔曰（中略）授無品貞固親王四品。中納言從三位在原朝臣行平正三位（後略）

『三代実録』仁和三年（八八七）正月

七日辛巳。天皇御紫宸殿、賜宴侍臣、觀覽青馬。奏女樂。宴竟賜祿各有差。」詔、授無品貞元親王四品（後略）

これによれば二人には弱冠の年齢差があると考えら

れる。当時の元服年齢をみると、陽成天皇が十五歳、同日に元服した同母弟の貞保親王が十三歳である。貞保親王は元服と同時に直叙されている。

そこで貞固親王と貞元親王の直叙時の年齢を十五歳とすると、親王宣下時はそれぞれ四歳と一歳になる。貞元親王、一歳では貞保親王との年齢差が逆転してしまうため、貞元親王の場合は元服が何らかの理由で遅くなったと考えたほうが妥当であろう。これらを勘案すれば、貞観十五年（八七三）の親王宣下のときに名前が挙がる皇子たちは大体四、五歳ということになる。したがって包子内親王も同母弟との年齢差を考えて、大体四歳前後とすることができる。仮に四歳とすれば貞観十二年（八七〇）の誕生である。したがって前年八六九年頃、行平女は後宮に入ったのであろう。ちなみに包子誕生の年の一月十三日に行平は参議となっている。

包子、貞数の生母、行平女は、『尊卑分脈』「大江朝臣」の項に記載はないが（2）、「第一清和天皇孫経基王子満政満季満快流」の項、貞数親王のところに「母中納言行

平女」と傍書があり、包子内親王の所にも、「母同貞数親王」と傍書されている。後宮での身分は、皇子貞数が親王とされた日、生母について「母更衣」とある（一）。この行平女に該当する人物として、『三代実録』の仁和元年（八八五）正月二十二日条および仁和三年（八八七）正月二十日条に叙位されている在原朝臣文子が考えられる。仁和元年には正五位下、三年には従四位上となっている。

『三代実録』仁和元年（八八五）正月

廿二日戊寅。左兵衛大尉正六位上在原朝臣棟梁・左衛門大尉正六位上良岑朝臣遠年並授従五位下。進四品紀内親王階加三品。授従五位上在原朝臣文子正五位下。

『三代実録』仁和三年（八八七）正月

廿日甲午。（中略）是日。詔、授正五位下在原朝臣文子従四位上。従五位下文室朝臣良子、无位藤原朝

臣年芳子並従五位上。无位大原真人數世従五位下。

女叙位は隔年の正月に行われるため、在原文子は連続して位を賜ったということになる。しかも二度目は一氣に従四位上を賜っている。この時期『三代実録』に名前が載る在原氏の女性はこの文子のみであることから文子が行平女であり、更衣であると考えてよいであろう。なお『伊勢物語』古注釈、契沖の『勢語臆断』には七十九段の箇所には『三代実録』の記述を載せるがそれには「三代実録第二十八云貞観十八年三月十三日辛卯皇子貞数为親王年二歳母更衣文子参議太宰権帥従三位在原朝臣行平之女也（後略）」とあり、「更衣文子」と明記されている（3）。

元慶八年（八八四）二月四日、行平は陽成天皇の二条院行幸に扈從した（4）、陽成天皇はこの直後に讓位し、同月二十三日、光孝天皇が即位した。同日、行平は正三位を賜り、三月九日に民部卿に任ぜられた。皇統が変わ

るこの時期も行平は変わることなく朝堂に連なり、十月

二日の大嘗会では前次第司長官を務めている。翌仁和元年（八八五）二月二十日には、中納言、民部卿のまま陸奥出羽按察使を拝命するなど、行平のこの時期の重用のされ方は特に著しい。この間に文子の叙位があり、外孫貞数親王の舞の記事がある。この状況は、この頃が行平を初めとする在原一族にとって、もっとも華々しい時代であったことを示している。行平の弟、業平はこの少し前、元慶四年（八八〇）五月二十八日に五十六歳で亡くなっており、この栄華をみることはなかった。また清和天皇も業平と同じ元慶四年（八八〇）十二月四日に崩御している。文子の叙位や貞数親王に華やかな舞の機会が与えられているのは偏に外祖父行平の働きによるものといえるであろう。目崎徳衛氏によれば、行平は「剛直な良吏型官人」であり、「剛直と民政的関心をもって、在地の良吏と対応する活動を中央において行った」とされる。氏は詳細に史料をあげて有能かつ良心的な官人としての行平の人物像を活写され、そして在原氏不遇説を

打破された（5）。

さて、包子内親王に関する直接の記事は冒頭の『三代実録』の記事と『日本紀略』寛平元年（八八九）四月二十二日条の薨伝の二つであり、あとは、後掲の諸系譜史料にその名を記されるにすぎない。

『日本紀略』寛平元年（八八九）四月

廿二日癸未。无品包子内親王薨。清和天皇第一皇女。

これには「第一皇女」とあるが、冒頭に掲げた『三代実録』の記述では、孟子内親王（藤原諸葛女所生）に次ぐ「第二皇女」ということになる。

一方、同母弟貞数親王については、『伊勢物語』七十九段などに、逸話が残され、行平・業平等在原一族にとつて、親王の存在がかけがえのないものであった様子が窺われる。業平の詠んだ和歌に在原氏における親王の存在の大きさがよくあらわれている（6）。

七十九段 千ひろあるかげ

むかし、氏のなかに親王生まれたまへりけり。御産屋に、人人歌よみけり。御祖父がたなりけるおきなよめる、

わが門に千ひろあるかげを植ゑつれば夏冬たれかかくれざるべき

これは貞数の親王、時の人、中將の子となむいひける。兄の中納言行平のむすめの腹なり。

(小学館新編日本古典文学全集による)

また舞が得意であつたことが、『三代実録』に二カ所、記述されている。最初のは八歳になつた元慶六年(八八二)三月二十七日条、皇太后藤原高子の四十賀の祝いの席で陵王を舞つた時のもので、外祖父行平が感激して、外孫貞数親王を抱きかかえて喜んだことが記されている。

貞数親王舞陵王。上下観者感而垂涙。外祖父参議從三位行治部卿在原朝臣行平候舞台下、抱持親王、歛躍而出。親王于時年八歳。太上天皇第八之子也。

(貞数親王、陵王を舞う。上下観る者、感じて涙を垂る。外祖父参議從三位行治部卿在原朝臣行平、舞台の下に候い、親王を抱き持ちて、歛び躍りて出づ。親王、時に年八歳。太上天皇の第八の子なり。)

二度目は十二歳の折、仁和二年(八八六)正月二十日、仁寿殿の東庭において、散手を舞つた。散手は竜頭の甲をつけ、帯剣し貴人の面をつけ鉾を持つて舞う武舞である。

仁和二年正月

廿日庚子。(中略) 清和太上天皇第八皇子貞数親王及四位已上子童男者十許人、在前教習。是日出舞。群臣歛洽、通宵楽飲。(後略)

(二十日庚子。清和太上天皇の第八皇子、貞数親王および四位以上の童男十ばかりの人、前に教習在り。是の日舞出づ。群臣、洽く歛び、宵を通して樂で飲む。) ※童男「男」は総角。子ども

仁和二年正月二十一日条

是日。勅聴貞数親王帶劔。親王昨舞散手。其舞裝束、帶劔執受。故特賜之。親王時年十二歳。

(是の日、勅して貞数親王に帶劔を聴す。親王、昨散手を舞う。其の舞装束、劔を帯び受を執る。故に特に之を賜ふ。親王時に年十二歳。)

包子内親王について、親王宣下および薨伝という公的な事象以外は全く残らないことは、かえつて内親王が在原一族の全き内親王として、大切にかしづかれていたと解してよいであろう。この時代、特に獵奇的な醜聞でも無い限り内親王は世人に余分な関心を引く存在ではな

いからである。包子内親王の「包」は「つつむ」「かくす」などに意味があることから、特に大切に覆い隠す意をもつてつけられたと考えることはできないだろうか。行平が貞数親王を非常にかわいがつていたことから、同母姉である包子内親王も、同様に鍾愛したことと思われる。文子所生の両親王は、在原氏にとって掌中の玉ともいえる存在であつたと考えられる。

寛平元年(八八九)四月二十二日に包子内親王がわずか二十歳ほどで亡くなつたとき、行平は七十一歳であつた。これより前、仁和三年(八八七)六月二十九日に行平の息子遠瞻が鴨川の邸宅で雷に打たれて亡くなつてゐる(7)。晩年における息子と孫の死が行平にとって大きな打撃であつたことは想像に難くない。寛平五年(八九三)七月十九日、行平薨去、七十五歳であつた。貞数親王は延喜十年(九一〇)六月五日、三十六歳で薨去する。生母文子については不明である。

藤原良房以来、基経、忠平と藤原北家を中心とした政治体制へ移行していくなかで、在原氏や橘氏、その他弱

小氏族の娘たちが後宮へ入ることは、もはや政権への布石というよりは、天皇家と繋がっているという榮譽、或いは過去の榮光の残滓ほどの意味合いに過ぎなかったといえよう。平城天皇孫である行平にとって、孫が親王であることは、天皇家との結びつきを象徴する特別な意味があつたかもしれない。天長三年（八二六）に阿保親王の上表により行平・業平等が在原姓を賜つて以降（8）、行平女文子以外この系統の在原一族から入内した女性はいない（9）。結果的に包子内親王はかれらにとつて唯一の内親王ということになった。

（一文字昭子）

（注）

- （1）『三代実録』貞観十八年（八七六）三月十三日条「十三日辛卯。皇子貞數爲親王。年二歳。母更衣參議大宰權帥從三位在原朝臣行平之女也。皇女識子爲内親王。年三歳。母更衣故神祇伯從四位下藤原朝臣良近之女也。皇子長賴。賜姓源朝臣。年二

歳。母更衣從五位下行信濃權介佐伯宿祢子房之女也。」

- （2）大江氏が土師氏から出たことは明らかであるが、『尊卑文脈』および大江氏系図諸本ではみな平城天皇の後裔であるとする。近藤敏喬編『宮廷公家系図集覽』（平成六年・東京堂出版）大江氏の項に平城天皇後裔説について「これは明らかな仮冒である」と注記する。

- （3）国史大系『三代実録』にこの記事自体はあるが、「文子」の文字はなく、異文の指摘もない。『三代実録』貞観十八年（八七六）三月十三日条「辛卯十三日。皇子貞數爲親王。年二歳。母更衣參議大宰權帥從三位在原朝臣行平之女也。皇女識子爲内親王。年三歳。母更衣故神祇伯從四位下藤原朝臣良近之女也。皇子長賴。賜姓源朝臣。年二歳。母更衣從五位下行信濃權介佐伯宿祢子房之女也。」

- （4）『三代実録』四十四卷、元慶八年（八八四）二月

四日条「是日、天皇出自綾綺殿、遷幸二条院。二

品行兵部卿本康親王・右大臣從二位兼行左近衛大將源朝臣多・大納言正三位兼行右近衛大將太皇太后宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣良世・中納言從三位在原朝臣行平・中納言從三位兼行左衛門督源朝臣能有・參議刑部卿正四位下兼行近江守忠貞王・參議正四位下行伊豫權守源朝臣冷・參議正四位下行右衛門督兼近江權守藤原朝臣諸葛・參議正四位下行左近衛中將藤原朝臣有実扈從、文武百官供奉如常。」

- （5）目崎徳衛『平安文化史論』（昭和四十三年・桜楓社）

- （6）和歌にある「かけ（蔭）」は真名本系では「竹」となっており、意味が異なる。しかし、貞數親王の存在によつて、在原一族が恩恵をうけるであろうという大意は同じである。

- （7）是日。右近衛少監正六位上在原朝臣遠瞻、在致仕中納言在原朝臣行平鴨河辺第、震死。遠瞻、是行

平之子也。

- （8）『三代実録』元慶四年（八八〇）五月廿八日条「廿八日辛巳。從四位上行右近衛權中將兼美濃權守在原朝臣業平卒。業平者、故四品阿保親王第五子。正三位行中納言行平之弟也。阿保親王娶桓武天皇女伊登内親王、生業平。天長三年、親王上表曰。无品高岳親王之男女、先停王号、賜朝臣姓。臣之子息、未預改姓。既為昆弟之子、寧畏齒列之差。於是、詔中平行平守平等、賜姓在原朝臣。（後略）在原氏は平城天皇の後胤として、高丘親王と阿保親王の二流がある。太田亮『姓氏家系大辞典』（昭和三十八年刊（昭和五十一年七版）・角川書店）

●史料 文頭の数字は西暦、（ ）内は筆者による。

【包子内親王】母、在原文子（行平女）／同母兄弟、貞數親王／最終位、無品

873『三代実録』貞觀十五年四月二十一日条

是日。定親王八人源氏四人。皇子貞固。母橘氏。治部大輔休蔭之女。皇子貞元。母藤原氏。參議治部卿仲統之女。皇子貞保。母女御藤原氏。故中納言長良之女。皇子貞平。母藤原氏。右中弁良近之女。皇子貞純。母王氏。中務大輔棟貞之女。皇女孟子。母藤原氏。兵部大輔諸葛之女。皇女包子。母在原氏。參議左衛門督行平之女。皇女敦子。与貞保同母並爲親王。皇子長猷。母賀茂氏。越中守岑雄之女。皇子長淵。母大野氏。前石見守鷹取之女。皇子長鑒。母佐伯氏。信濃權介子房之女。皇女載子。与「貞」長猷同母並爲源氏。貫隸左京一條一坊。

889『日本紀略』寬平元年四月二十二日条

廿二日癸未。无品包子内親王薨。清和天皇第一皇女。

*『帝王編年記』清和天皇の項・皇女の欄

包子内親王（母同貞數）※貞數親王（母在原氏行平卿女）

*『一代要記』（改定史籍集覽所収）清和天皇の項・皇女の欄

包子内親王（寬平元年四月二十三日薨）

*『皇代記』清和天皇の項・皇女の欄
包子内親王

*『本朝皇胤紹運錄』

包子内親王（母同貞數）※貞數親王（四品。延永十六薨。卅三。母行平女）

*『尊卑分脈』第一清和天皇孫經基皇子滿政滿季滿快流包子内親王（母同貞數親王）※貞數親王（母中納言行平卿女、延喜十年六月五日薨卅二）